福沢諭吉

岩波写真文庫 135

福沢諭吉
135

岩波写真文庫 135 福沢諭吉

編集 岩波書店編集部
監修 福沢諭吉著作編纂会
写真 岩波映画製作所

銅像のある慶応義塾校庭

福沢諭吉は、日本を愛し、日本を真の独立国にするために一生を捧げた人である。封建思想の根づよく残っていた時代に、人権の尊重を教え、自由の精神を鼓吹し、民主主義を説き、学問研究を盛んにして正しい道理に基づく社会をうちたてようと努力した。明治の文化は福沢などの思想を中心として大きな発展を遂げた。しかし時の経過と共にその思想が次第に忘れ去られ、時にはその思想を喜ばない者が時の勢に乗ずるの形を示し、遂に国の歩みには大きなつまずきが来た。そのつまずきから立ち直ろうとしている現在、われわれの胸に強く思い出されるのは福沢諭吉の名である。この人の生涯を知りその思想を探ることは、今のわれわれに新しい勇気と希望を与える。

解説のうち表題と出典のあるものは、福沢の文章を、原文の味を失わぬ程度に現代文に書きかえたものである。

目　次

定価100円 1955年1月10日 第1刷発行 1955年4月15日 第2刷発行 発行者 岩波雄二郎 印刷者 米屋勇 印刷所 東京都港区芝浦2ノ1 半七写真印刷工業株式会社 製本所 永井製本所 発行所 東京都千代田区神田一ッ橋2ノ3 株式会社岩波書店

福澤諭吉ハ幼ニシテ父ヲ喪ヒ教育甚タ不行届幼少ノ時いろはヲ學ヒ其他ニ手習シタルヿナシ年十三四歳自カラ起テ漢書ヲ讀ミ頗ル勉ムト雖氏家貧ニシテ習字等ノ暇モナク性質コレヲ好マズ又少年ノ時代ニ學友ノ氣風モアリテ專ラ經史議論ニ心ヲ用ヒ詩作小品文ノ如キハ竊ニ蔑視シテ學フ意モナシ唯學塾定式ノ詩會等ニ僅

福沢自筆詩集序文

日本人は今の日本に
満足せんとするか

今の日本人は決して文明の進歩に退屈する者ではない。現在の日本に満足する者ではない。ところが明治維新以来示した進取の大勇気を今日急に失ったような変な様子が見えて来た。それは思うに今の日本で上流の人たちのうちごく少数の一部が、いろいろの事情から進歩に反対したいばかりに、日本全国の人民を自分たちの都合のよいように解釈して、日本人は元来老朽卑怯な国民で、一時の思いつきで西洋文明を採用したが、今日ではかえって後悔しているものだと吹聴するだけの話である。一個人が退歩したいのはその人の勝手であるが、全国の人民にも一緒に退歩を勧めるようなことをするならば、私は国のためにこれを默っているわけには行かないのである。（明治十六年八月、時事新報社説、続全集、一ノ四五二頁）

鈴藤勇次郎筆　咸臨丸の図
（1860年作　20頁参照）

福沢諭吉は、天保五年十二月十二日（西暦一八三五年一月十日）大阪玉江橋北詰の中津藩蔵屋敷で生れた。その父百助(ひゃくすけ)は九州中津（大分県）の奥平家の家臣で、下級の会計官吏として大阪に在勤していた。百助は十三石二人扶持の下士であったが、儒学の造詣深く、詩文を能くし書を愛し、当時一流の学者と親交があり、人に敬畏せられたと伝えられている。その多年探し求めていた清朝の乾隆帝治世の法令を集めた「上諭条例」六十四冊が手に入ったとき、たまたま男子が生れたので、百助はその書名に因んで、これに諭吉と名づけた。

百助は諭吉成長の後はこれを仏門に入れて僧侶にしようと考えていたということである。それは百助が自分の身分の低いため、学識が衆に優れていながら生涯を俗吏として過さねばならぬ運命を歎いて、その生れたばかりの児の行く末を思い、身分にかかわりなく名を成すことのできる仏門に入らしめようとしたのであろうと、福沢は後年「福翁自伝」の中で父の

心中の苦しさ、愛情の深さを回想し、「私の為めに門閥制度は親の敵で御座る」と痛憤している。

諭吉は生れて十八ヵ月目、天保七年六月に父が脳溢血で死去したので、一兄三姉と共に母に伴われて藩地の中津に帰った。

今その誕生地の址は、大阪大学医学部の構内に当り、同学部山口病棟の地下室の廊下にその生ぶ湯の水を汲んだ井戸の址を示す標識がある。誕生地の記念碑は一度戦争のため失われたが、昭和二十九年十一月に再建された。

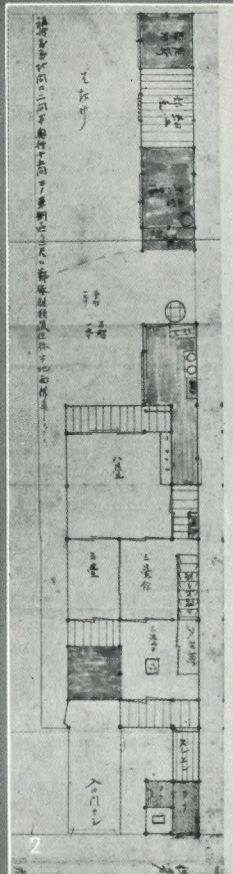
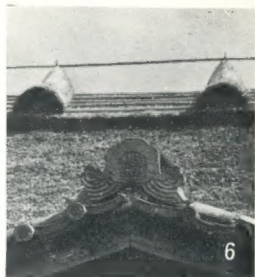
①「福翁自伝」の草稿の一節．②誕生地記念碑．③中津の旧家から発見された百助旧蔵の「上諭条例」．④誕生地址の遠望．⑤うぶ湯の水を汲んだ井戸はこの廊下のところで，⑥そこに「福沢井蹟」と記した大理石の標示板がはめこまれてある．

上士と下士

旧中津奥平藩士の数はおよそ千五百名で、その身分役柄をくわしく分ければ百いくつの階級になるが、大別すれば上士と下士との二つになる。下士はどんなに功績があっても才能力倆がすぐれていても、決して上士の席に昇進することは許されなかった。だから下士はその下等の範囲内で身分の上り下りを気にして、できるだけ昇進したいとは思うけれども、上士の列に入ろうと思う気持は最初から持たなかった。それは地を走る獣が決して空を飛ぶ鳥の仲間に入りたいと思わないようなものであった。上士と下士とは、権利も違うし、互いに結婚もできず、貧富も教育も、家の暮し向きから風俗習慣まで異なるものであるから、その栄誉利害のあるところも違い、従って互に親しみ合う気持も上下両士族の間に通じにくくなるのは当然で、上下互いにひそかに疑うこともあり憤ることもあって、永い間にがにがしい有様であった。しかし、天下一般に分を守るの教を重んじ、一切の事物についてそれ

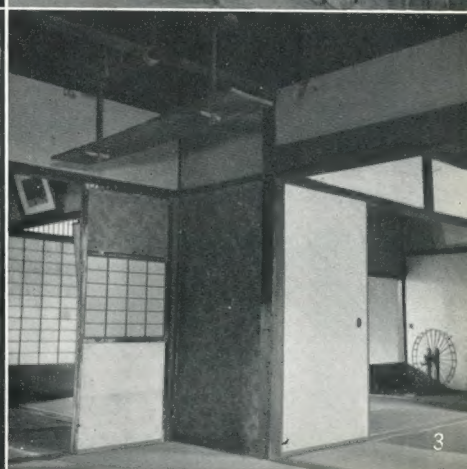
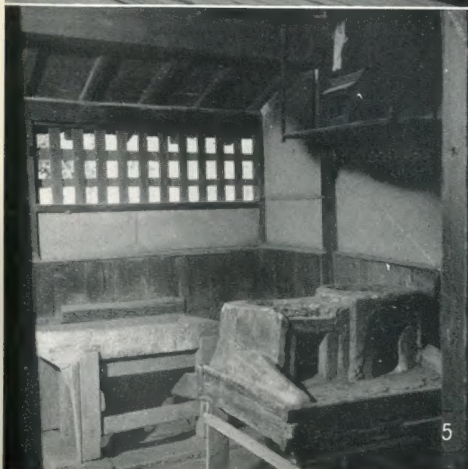
福沢は中津で二軒の家に住んだ．初め住んだ家は現存せず，後に住んだ家は，市で史蹟として保存している．①②は初めの家の平面図とその封筒で，福沢がみずから図を引いたもの．③は現存する旧宅の全容．⑤は入口．⑥は裏庭．④は市の建てた道しるべの標示である．

ぞれ秩序が立っていて少しもこれを変更することのできない時勢であったから、その時勢に抑えられて、平生の疑いや憤りを外に現わすことができず、あるいは忘れたような風になってこれを現わすことを知らなかっただけである。下士の中には、人物のすぐれた者もないではなかったが、こういう人物は必ず何かの下役に取り立てられるので、一身の利害にとらわれて、同類一般のことを顧る余裕がなかったのである。

（明治十年五月、旧藩情、全集六ノ六七七―八六頁）

旧藩の武士はその身分階級により，家の造りから門構えまで厳しい掟によって定められていた．福沢家のような下級武士は門を設けることや玄関を構えることは許されなかった．右頁上段①は福沢旧宅の全景で，道路から左へ築地塀の切れているところが，もとの入口で，その先きの切れ目は中津市の造った新しい入口である．②は家の表入口と前庭へ通ずる開き戸．③は家の内景で左側の額面の上っているところが上りがまちの部屋，④は前庭，⑤は台所である．左頁は階級による藩士の住居の差異を示したもので，⑥は玄関の屋根瓦に定紋のついている家格の高い家．⑦は福沢家などと同格の下士の家の入り口．⑧は上士の家の門構えを示し，⑨は更に格の高い家の武者窓を持つ長屋門である．

6

7

4

中津市では福沢旧宅を火災から護るため周囲の地所を買い拡げて公園とし，ここに銅像や記念館を建て福沢研究資料を集めて参観者に示している．①はその銅像．③の左側が記念館で正面は福沢旧宅．②は福沢家の菩提寺明蓮寺．④は大分県教育会が中津旧城内の公園に建てた独立自尊の碑である．福沢家では大正４年に中津の祖先の墓を全部東京に移したが明蓮寺内には今でも飯田家との共同墓碑⑤が残っている．中津市内には今も旧藩時代の俤を残している街がある．⑥は上流士族の街で⑦は商人の街である．

5

1

2

3

西洋人と日本国

西洋人が千里を遠しとせずして東洋に来るのは、共に仁義を語るがためではなく、ただ普通に利益を得ようとするだけの目的である。それならば、出掛けて来る前に、東洋諸国の中で、人口多く国ひろく天産豊かに遺利の多いはどこか、今後通商上で大に利益を挙げるべきはどこかと考えたことであろう。そしてその眼光が支那に注がれたことは明かである。ところがその支那は容易に西洋人を近づけないで、最初の目算通りに行かないので、そこで日本の開国を促しその文明を進めて、同じ東洋の国で日本の進歩はこの通りである、支那も手を束ねて傍観しているわけには行かぬと羨望の心を起させ、進んで西洋人に依頼して文明の利器を採用させるようにすれば、多年の目的を達することができるであろうと、暗々裡に日本の開進を促した意味がないともいわれないのである。

（明治十六年十月、時事新報社説、全集八ノ四八九頁）

嘉永6年(1853)米国のペリー艦隊が浦賀に来航した．①は中津藩士八田清助の写した絵巻の一部．②はその絵巻のはじめに記した福沢の説明．以下の各図はペリー艦隊日本遠征記の插絵で③は那覇の港．④は米国軍艦ミシシッピイ号．⑤は九里浜上陸の図．⑥は横浜に上陸したペリー提督．⑦は横浜警護の日本武士の様子．

徳川幕府の鎖国政策により、世界の歴史の動きから取り残されて、泰平の夢を貪っていた日本は、ペリー艦隊の来航によって、俄かに熟睡の底から揺り起された。目がさめてみたら、世界史のくるめく渦巻の真只中に、全く孤立無援で投げ出されていたのに気がついたのである。攘夷、開港、海防、修交、さまざまの叫びが国内のいたるところに湧き起った。みな国の前途を憂うる真剣な叫びであった。福沢の蘭学修業もまた、国防の必要を痛感した兄の勧めによって志を立てたのである。

洋学の先人

形に現われたものはとかく目につき易い。政府の革命に驚いてこれを偉業とし、戦争を見てこれを大事件とし、政治上の策略を施す者をあがめて智者といい、世間ではまるでこれが人事の極上であるように見るが、これらは人事の一部分に過ぎず、その本を尋ねると人心の変動発達は、実は無形のところに源を発しているのである。わが洋学の先人は、百数十年の昔に於て、この人心変動の元素を養い、これを伝えて後世の今日まで遺し、以て文明の路を開拓した人で、これを一時的な戦争の勝利などに比較したならば、到底問題にならぬほど大きく美しい仕事である。現代の文明も固よりまだ発達の途中にあるもので、為すべき仕事は千のうち一つだに完成したとはいえず、行くべき路は百里もあるのにほんの数歩もふみ出さない有様で、今の学者も安閑としては居られないのである。時の流れに逆らうのを恐れず、世の非難を憚らず、一個独立の精神を発揮して、洋学の先人が時代の風潮に甘んじなかった模範を学ぶならば、あるいはこれに恥じないですむこともあろうかと思うのである。（明治九年九月、福沢文集巻一、全集四ノ五〇三頁）

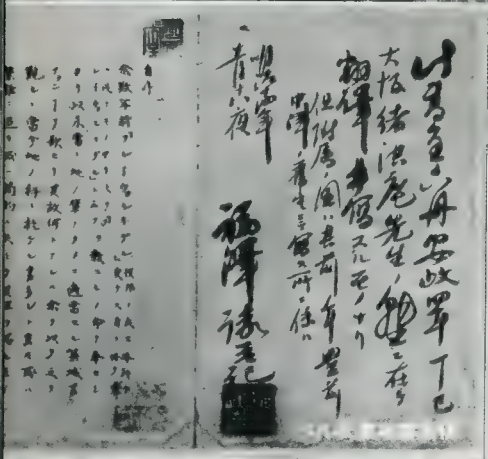
明治二年新刻
和蘭事始
天真樓藏板

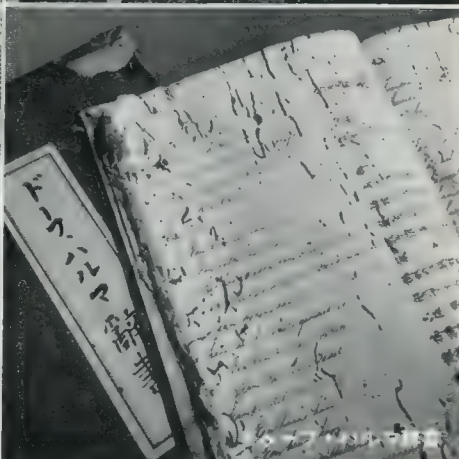
明治二年己巳新刻
蘭學事始
天真樓藏版

①②⑤は蘭学創始の先覚者で右から前野良沢自画像，杉田玄白，大槻玄沢．③はこの人々が苦心解読したターフル・アナトミアの扉．④は福沢の書入れのある蘭学事始の写本．⑥はその写本により刊行された蘭学事始初版本．⑦は俗に「おらんだ正月」と呼ばれた西暦の元旦を祝う蘭学者の集り，芝蘭堂新元会の図である．

数理学と独立心

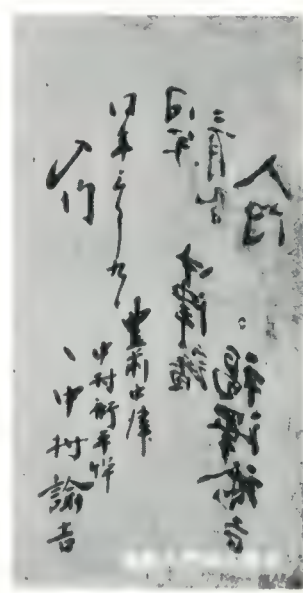
東洋と西洋と、その進歩の前後遅速を見ると、実に大変な相違である。どちらにも道徳の教もあれば経済の議論もあり、文に武にそれぞれ長所も短所もあるが、国勢の全体から見れば、富国強兵、最大多数の最大幸福という点では、まだまだ東洋は西洋に及ばぬところがある。いったい国の勢というものは国民の教育に基づくもので、この教育に何か相違がなければならない。そこで東洋の儒教主義と西洋の文明主義とを較べてみると、東洋にないものは、有形に於て数理学と無形に於て独立心と、この二点である。西洋の政治家が国事を司り、実業家が事業を営み、国民が愛国の念に富み、家族が団欒の情に濃かなのも、その大本はここにあるといえる。つまり国家のある限り、また人類のつづく限り、人間万事、数理を離れることは出来ず、独立の精神の外に依るところがないというこの大切な一義を日本では軽く見ている。これでは、国を開いて西洋諸強国と肩を並べることは、到底覚束ないように思われる。

（明治三十一年十一月、福翁自伝、全集七ノ五〇一頁）

①は文政年間シーボルト附のオランダ人絵師の写した長崎港の図，中央の扇なりの島がオランダ商館を置くために造られた出島である．福沢は最初同藩家老の子息奥平壱岐を頼ってその寄寓していた桶屋町光永寺②の食客となり，次いで壱岐の世話で砲術家山本物次郎の家に食客となった．③はその山本家の址に今も遺る井戸である．福沢は長崎で蘭学の初歩を学んだが上達すこぶる速かであったという．④は当時の蘭学生の珍重した蘭日辞書「訳鍵」で，福沢もこの辞書を頼りに勉強した．⑤は光永寺の遠望で，写真手前の屋根ごしにその山門と大公孫樹が見られる．⑥はその山門．⑦は光永寺の書院の廊下で福沢の居た頃とは模様替えになっているが，写真正面の板戸のあたりに福沢が居って，その右の床の間のあるのが奥平壱岐の居間であったという．

緒方洪庵肖像

嘉永六年にペリー艦隊が日本に来たことは、国中に海防の必要を痛感させ、俄かにオランダ流の砲術研究が盛んとなった。従ってオランダ語の書物を読む蘭学が流行した。

福沢も兄のすすめにより安政元年二十一歳の春、長崎に出て蘭学を修業することになり、一年の後、大阪に行き緒方洪庵の適塾に入門した。右に示す入門帳の署名は、福沢が幼少のときから叔父中村術平の養子になって中村姓を名乗っていた時のもので、後に兄の死去により家督をついで福沢姓に復したとき、その上に貼紙をして福沢諭吉と書き直した。裏返しに見える文字がその貼紙である。

封建門閥の世の中で、この塾ばかりは身分にかかわりなく、人物学識の優劣で値打ちのきまる世界で、福沢はここで全く自由な溌剌とした四年間の青春時代を過した。安政四年この塾の塾長に挙げられたが、その翌年、藩の命令で江戸に出て築地鉄砲洲に蘭学塾を開くことになった。福沢二十五歳のとき、一八五八年である。

万延元年(1860)徳川幕府は条約の批准交換のため最初の遣外使節をアメリカへ派遣した．幕府の海軍は使節警護の名目のもとに遠洋航海を試みようとし，軍艦咸臨丸を運転して最初の太平洋横断の壮挙を敢行した．軍艦奉行木村摂津守が司令官で，艦長は勝麟太郎(のちの伯爵勝安芳)．福沢は木村に頼んでその従僕という名義でこの艦に乗組み，初めてサンフランシスコとハワイを見た．これが福沢の海外に赴いた最初である．

FRANK LESLIE'S ILLUSTRATED NEWSPAPER

①はサンフランシスコで撮影した福沢の肖像で，このとき27歳，これが福沢の最初の写真である．②はその写真屋の娘と一緒に写したもので，福沢はこれを隠しておき，帰途の船中で一行の青年士官たちに披露し，一場の戯れをいって彼等を驚かしたと「福翁自伝」に書いてある．③は木村摂津守の肖像．④は米国絵入新聞に掲げられた日本使節の動静．⑤はサンフランシスコで写した咸臨丸乗組員の一部で，右端が福沢である．

オランダにて

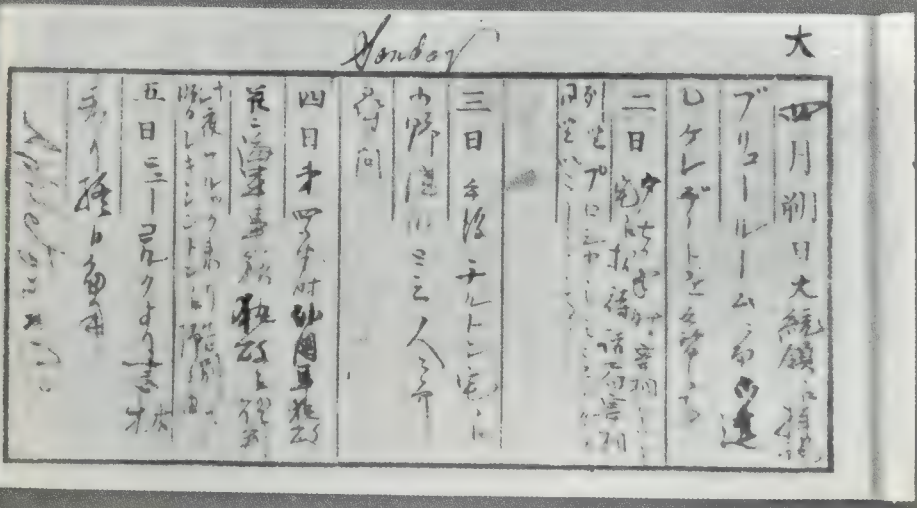
アメリカから帰った翌年の冬、徳川幕府はヨーロッパ各国へ開港延期の談判のために使節を派遣することになり、福沢は幕府の飜訳方としてこの一行に随行し、文久二年（一八六二年）いっぱいをフランス、イギリス、オランダ、プロシア、ロシア、ポルトガル等の各国を巡遊して帰った。

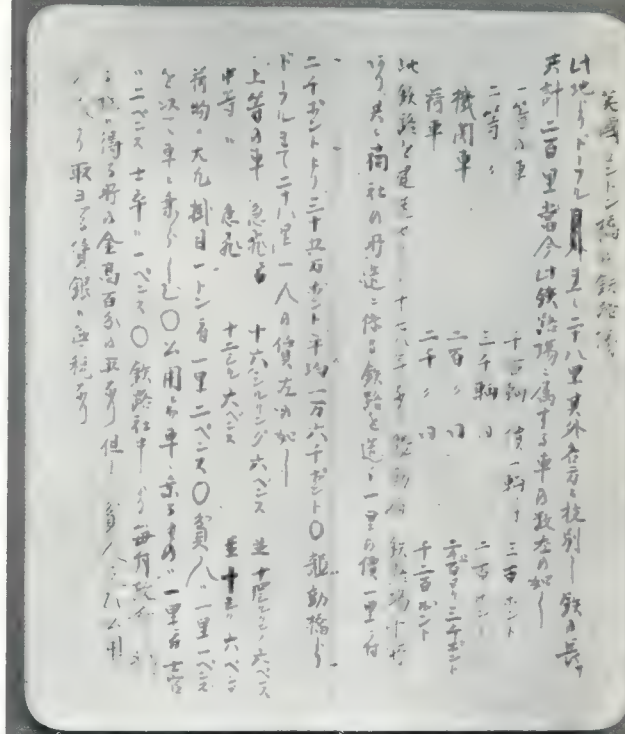
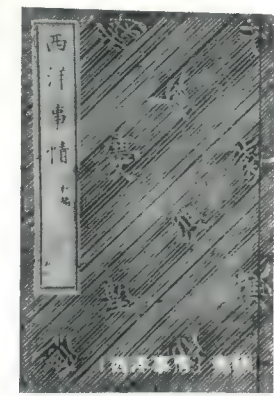
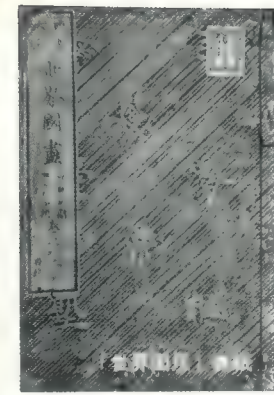
前回のアメリカ行では、サンフランシスコとハワイを見ただけで、見聞も甚だ狭かったが、ヨーロッパ巡遊では先進文明諸国の文物制度を細かに観察して、その見聞を一々書きとって帰って来たので、帰朝後その見聞記に基づき、西洋の諸書を参照して、「西洋事情」十巻を著わした。これは日本の西洋研究に非常な刺戟となり「一人これを語れば萬人これに応じ、朝に野に苟くも西洋の文明を談じて開国の必要を説く者は、一部の西洋事情を坐右に置かざるはなし。西洋事情は恰も鳥なき里の蝙蝠、無学社会の指南にして、維新政府の新政令も或は此小冊子より生じたるものある可し」と福沢みずから記している通り、その著訳書中もっとも広く世に行われたもので、その初編の如きは二十五万部ぐらい出たろうといわれている。

福沢はさらに慶応三年幕府の軍艦受取委員の一行に加わって、またアメリカに行き、維新前に都合三回の洋行をした。

パリにて

SOCIÉTÉ D'ETHNOGRAPHIE AMÉRICAINE & ORIENTALE

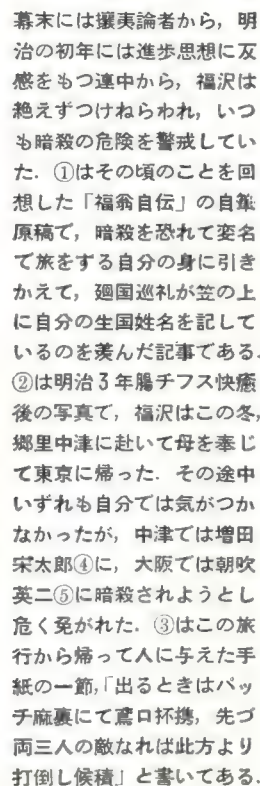
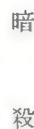
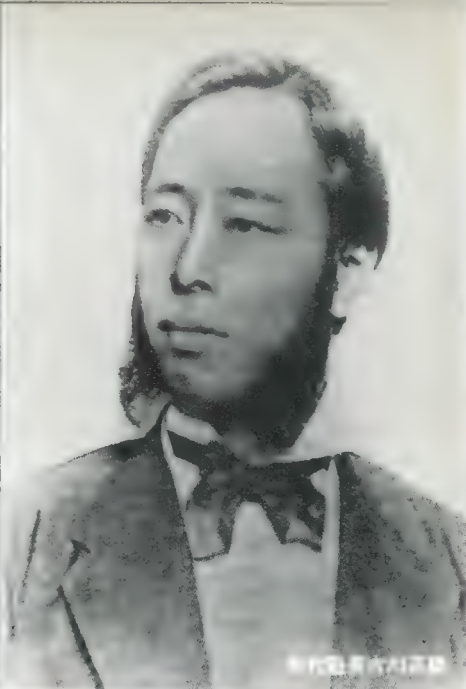
①はヨーロッパ旅行中の福沢の手帳．福沢はこの旅行でフランスの東洋語学者レオン・ド・ロニ⑤と親交を結び，その推薦でアメリカ及び極東民族誌学会の正会員となりその会員証⑥を贈られた．④は後にロニがパリで発行した日本語新聞「世のうはさ」．福沢の第三回目の洋行は慶応３年のアメリカ行て，②はその一行の記念写真て向って右端が福沢．③⑦はその時の日記帳．

文明の原動力

西洋諸国は文明開化であるというが、それはどこでわかるか。道徳の教でもなく、文学でもなく、理論でもない。私に言わせれば、それは交通の便にあるというより外はない。人間社会の大小や活潑沈滞は皆交通往来の便不便に由るもので、これこそ人事進退の動力と認めねばならぬ。ところが十九世紀に至って蒸気船、蒸気車、電信、郵便、印刷の発明工夫を以て、この交通の路に長足の進歩をしたのは、あたかも人間社会を顛覆するほどの出来事であるが、実をいえば印刷も郵便も電信も皆蒸気によって実用になるのであるから、人間社会の原動力は蒸気にあるといってもよく、十九世紀は蒸気の時代で、近ごろの文明は蒸気の文明であるといってもよい。（明治十二年七月、民情一新、全集五ノ一七〇頁）

新文明の筋書台帳

今の日本は新日本と称して、文明諸国と交際して少しも見劣りのしないようになったが、新日本は突然生れたわけではなく、その原因結果の筋道をたどると、近くは数十年、遠くは数百年以上にもわたって、移り変りの手がかりを見つけることができるであろう。しかしとにかく日本が旧物破壊新物輸入の大活劇を演じたのは、開国以来数十年のことで、その間の筋書台帳となり、全国民に自由改進の新しい舞を舞わせたものの中で、私の著書飜訳もおのずからその一部を占めたと言っても差支えなく、私の放言して憚らぬところである。（明治三十年九月、福沢全集緒言、全集一ノ一頁）

「帳合之法」表紙

幕末には攘夷論者から，明治の初年には進歩思想に反感をもつ連中から，福沢は絶えずつけねらわれ，いつも暗殺の危険を警戒していた．①はその頃のことを回想した「福翁自伝」の自筆原稿て，暗殺を恐れて変名て旅をする自分の身に引きかえて，廻国巡礼が笠の上に自分の生国姓名を記しているのを羨んだ記事である．②は明治3年腸チフス快癒後の写真て，福沢はこの冬，郷里中津に赴いて母を奉じて東京に帰った．その途中いずれも自分ては気がつかなかったが，中津ては増田宋太郎④に，大阪ては朝吹英二⑤に暗殺されようとし危く免がれた．③はこの旅行から帰って人に与えた手紙の一節，「出るときはパッチ麻裏にて鳶口抔携，先づ両三人の敵なれば此方より打倒し候積」と書いてある．

暗殺

世には私怨のためや銭を奪うために人を殺す者があるが、この連中はもちろん罪を犯す覚悟で自分でも罪人の積りである。ところが別に暗殺ということがある。これは一身のためでなく、いわゆる政敵を憎んでこれを殺すものである。天下のことにつき銘々の考を異にし、自分一個の考で勝手に他人の罪をきめてほしいままに人を殺し、これを恥じないばかりか却って得意になって天誅を加えたと唱えれば、人もまたこれを称して報国の士であるという者がある。そもそも天誅とは何ごとであるか。もし国の政治につき不平の箇条を見出し国を害する人物があると思ったならば、静かにこれを政府へ訴えるべき筈であるのに、政府を差置いてみずから天に代って事を為すとは、商売違いも甚しいものといわねばならぬ。つまりこの類の人は、性質は律儀であるが物事の道理がわからず、国を憂うることは知っていても、どうすれば本当に国のためになるかという道筋のわからぬ者である。暗殺をして世の中の幸福を増したということは、これまでにまだ見たことはないではないか。（明治七年二月、学問のすゝめ六編、全集三ノ四八頁）

定

一 會社ヲ入ル者ハ其式トシテ金弐両可相納事

一 入塾ノ節ハ塾僕ニ金弐朱 つかはすへし

一 外宿之社中ハ毎月金弐朱可相納事

一 入塾之證人ハ東京ニて塾中之一身之事故悉く可引受事

慶應義塾會社

福沢は安政五年（一八五八年）藩命により江戸に出て、十月下旬鉄砲洲奥平家中屋敷内（現在の中央區築地明石町聖路加病院の前）の長屋に蘭学の塾を開いた。これが慶応義塾の起源である。

大阪から江戸へ出るとき、緒方塾の後輩で広島の人、岡本周吉（後に古川節蔵、維新後古川正雄）が同行を求めたので、これを伴っていった。これが福沢最初の門弟でありまた最初の塾長であった。元治元年（一八六四年）福沢は郷里中津に帰り、小幡篤次郎以下藩中の俊秀な少年子弟六名を伴って江戸に帰り、これを中核として塾風をすこぶる高尚清潔なものに改めた。小幡は生涯慶応義塾にあって終始福沢をたすけ、塾中では福沢に次ぐ長老と仰がれていた。慶応四年（その年九月に改元して明治となった）春、鉄砲洲から芝の新銭座に移転し、時の年号にちなんで慶応義塾と名づけた。その移転匆々、上野彰義隊の砲声を耳にしつつ福沢がウェーランド経済書を講義し、われらは治乱にかかわらず学業を廃せず日本の学問の命脈を維持する者であると、学生を激励したのは有名な話である。

小幡篤次郎

鉄砲洲附近地図

but already a person in whom the social feeling is at all developed, cannot bring himself to think of the rest of his fellow creatures as struggling rivals with him for the means of happiness, whom he must desire to see defeated in their object in order that he may succeed in his. The deeply-rooted conception which every individual even now has of himself as a social being, tends to make him feel it one of his natural wants that there should be harmony between his feelings and aims and those of his fellow creatures. If differences of opinion and of mental culture make it impossible for him to share many of their actual feelings—perhaps make him denounce and defy those feelings—he still needs to be conscious that his real aim and theirs do not conflict; that he is not opposing himself to what they really wish for, namely, their own good, but is, on the contrary, promoting it. This feeling in most individuals is much inferior in strength to their selfish feelings, and is often wanting altogether. But to those who have it, it possesses all the characters of a natural feeling. It does not present itself to their minds as a superstition of education, or a law despotically imposed by the power of society, but as an attribute which it would not be well for them to be without. This conviction is the ultimate sanction of the greatest-happiness morality. This it is which makes any mind, of well-developed feelings, work with, and not against, the outward motives to care for others, afforded by what I have called the external sanctions; and when those sanctions are wanting, or act in an opposite direction, constitutes in itself a powerful internal binding force, in propor-

tion to the sensitiveness and thoughtfulness of the character; since few but those whose mind is a moral blank, could bear to lay out their course of life on the plan of paying no regard to others except so far as their own private interest compels.

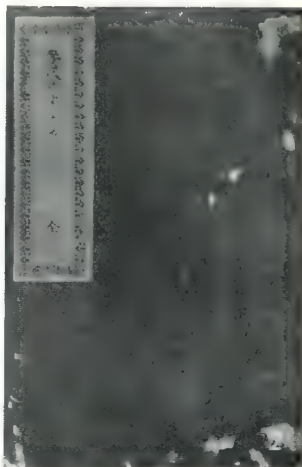
學問のすゝめ

福澤諭吉
小幡篤次郎 同著

一

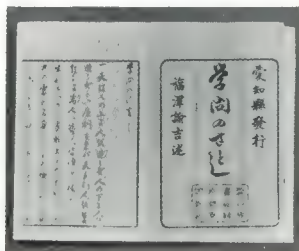
天ハ人の上ニ人を造らず人の下ニ人を造らずといへりされバ天より人を生ずるハ萬人ハ萬人皆同じ位にして生れながら貴賤上下の差別なく萬物の靈たる身と心との働を以て天地の間にあるよろづ

「学問のすゝめ」

これは一から十七までの小冊子で、その発売すこぶる多く、毎編およそ二十万と見ても、十七編合して三百四十万冊は出た筈である。内容が新しいことなので、一部の人気に合わず、とかく非難排斥の声が多かった。殊に明治六、七年頃からますます激しくなって、新聞までが筆を揃えて書き立てるので、毎日うるさくてやりきれなかったが、一々弁解もできないので、構わずにいる中に、方々から脅迫状は舞い込む、友人は忠告に来る、いまは命も危いという有様になったので、これは捨置けぬと思い、七年十一月七日の朝野新聞に慶応義塾五九楼仙万の名で長文の弁駁書を発表したところ、漸く世間の騒ぎも静まり、その後は攻撃の声を聞かなくなった。（明治三十年九月、福沢全集緒言、全集一ノ四五頁）

「学問のすゝめ」は最初は一冊だけの積りであったが，意外の売行きに17編まで続刊することになった．①②はその初版本の本文第一頁と表紙．④は「学問のすゝめ」第七編の所論に対し，福沢は楠公の戦死を権助の自殺に比較したという非難攻撃の火の手が挙り，世論がやかましくなった．それを諷した浮世絵新聞の一つ．⑤はその攻撃に福沢みずから反駁した朝野新聞への投書．③は当時非常に多かった「学問のすゝめ」の偽版の一種．

東京日々新聞

投書

學問ノスヽメ之評

近來福澤氏所著ノ學問ノスヽメヲ論駁スルモノ多ク而シテ其辞ノ向フ所ハ其第六編ト七編ナルガ如シ世ノ識者固ヨリ各其所見ヲ述ルノ權アリ余敢テ其駁者ヲ駁シ以テ一世ノ議論ヲ箝格セントスルニ非ザレドモ識者或ハ此書ノ通編ヲ見ザルノミナラズ其駁論ノ目的トスル所ノ六七編ヲモ通覧吟味セズシテ唯書中ノ一章一句ニ就キ遽ニ評ヲ下ス假スルモノ多シ是余輩ガ妄ニ一言ヲ述テ世ニ公布スル所以ナリ

五十年、報恩の行事

千葉県豊住村民ら 福沢翁の胸像と対面

暴政と人民

政府が政府としての職分を越えて、人民を苦しめる暴政を行うことがあったならば、人民としてこれに対してとるべき態度は三つより外にない。第一は、その暴政に甘んじて屈従することで、これはいわば人間の本分を棄てるもので、後世の子孫に悪例を残し天下一般に悪風を作り出すことになり、甚だよろしくない。第二は、力を以て政府に敵対することで、これは一人ではできないことで、必ず徒党を組まなくてはならぬ。つまり内乱を起すことになる。内乱となれば、問題は事の善悪から力の強弱に移ってしまい、政府の暴を憎んで人民みずから暴を働き、一を得ようとして百を害するという結果になり、これまた甚だ不都合である。第三は、正理を守って身を棄てることで、これは天の道理を信じて疑わず、いかなる暴政いかなる悪法の下に苦しめられても、その苦痛を忍んで志をまげず、一寸の兵器をも携えず、片手の力をも用いず、ただ正しい道理を唱えて政府に迫ることであって、これが三策のうちの最上の方法である。（明治七年三月、学問のすゝめ七編、全集三ノ五七頁）

印旛県長沼村（今は千葉県成田市の一部）は，村有の沼からの漁獲採藻によって生計を営む寒村であったが，明治の初年この沼の所有権を理不尽に国家に没入され，一村浮沈の瀬戸際にせまり，村民の代表小川武平等がこれを福沢に訴えた．福沢は微力の村民の後楯となり終始これを助けて，抗争25年，その最晩年に及んで遂に目的を貫徹したことがある．世にこれを長沼事件という．①は昭和29年1月長沼村民が福沢家へ年礼の帰途，慶応義塾に福沢の銅像を見たとき，これを報じた東京朝日新聞記事．②は村民に与えた福沢の「一村安全無我他彼此（いっそんあんぜんがたひし）」の書 ③は村民代表の一人小川武平．④は福沢の寄附で造られた小学校．⑥⑦⑧は干拓されて美田となった現在の長沼．⑤は村民達の建てた頌徳碑．

學問ノスヽメ四編

福澤諭吉 著

學者ノ職分ヲ論ス

近來竊ニ識者ノ言ヲ聞クニ今後日本ノ盛衰ハ人智ヲ以テ明ニ計リ難シト雖モ到底其獨立ヲ失フノ患ハナカル可シヤ方今目撃スル所ノ勢ニ由テ次第ニ進歩セハ必ス文明盛大ノ域ニ至ル可シヤト云テコレヲ問フ者アリ或ハ其獨立ノ保ツ可キト否トハ今ヨリ二三十年ヲ過キサレハ明ニコレヲ期スルヿ難カルヘシト云テコレヲ疑フ者アリ或ハ甚シク此國ヲ蔑視シタル外國人ノ説ニ從ヘ

福澤先生著

明治十年 丁丑公論 瘠我慢の説

時事新報社發行

抵抗の精神

およそ人たるものは自分の思い通りにしたいと思わない者はない。すなわちこれが専制の精神である。専制は人類の本性といってもよい。故に政府の専制というものは咎めるわけには行かないのである。しかし、これを放任しておけば際限のないことであるから、これを防がなくてはならぬ。これを防ぐには、ただこれに抵抗するより外に致し方がない。世界に専制の行われる限り、抵抗の精神はなくてはならぬ。それは火のある限り水が入用なのと同じである。近頃の日本は、文明が進むにつれて抵抗の精神が次第に薄くなって来たようであるが、いやしくも憂国の士は、この精神を保存して後世の子孫にその気脈を絶えさせないように心掛けねばならぬ。（明治十年十月、丁丑公論、全集六ノ四七七頁）

①は知識階級の人々が民間に独立して政府の刺戟となり，政府と並び立って国の文明独立に尽すべきことを論じた「学問のすゝめ」の一篇．②は在官の諸学者が福沢のその所説に答えまたはこれを批評した「明六雑誌」の記事．③は西南戦争に於ける西郷隆盛の立場を弁護した「丁丑公論」，維新前後に於ける勝安芳と榎本武揚との行動を批判した「瘠我慢の説」，両篇の合本．④は「瘠我慢の説」の草稿を示して勝，榎本の意見を求めた手紙．⑧はそれに答えた勝の返書．⑤⑥⑦は右から西郷，勝 榎本．

明六雜誌 第二號

一 福澤先生ノ論ニ答フ
一 學者職分論
一 學者職分論ノ評

石地蔵

耳があっても聞こえず、眼があっても見えず、口があっても話せず、両手も両足も動かせず、心に思うことも自由にならず、きまじめな顔で道ばたにぽつねんと立っているのは、南無地蔵菩薩である。まことに気の毒千万であるが、これは石の地蔵さまだから辛抱もしよいであろう。しかし人間の石地蔵の悲惨な有様は見るに忍びない。何の演説は聞いてはならぬ、これこれのことは語ることを許さぬ、何新聞と何雑誌を読むのはけしからぬ、何の書を読むは不届千万、そのほか心に思うことを筆に記しても人に語っても嫌疑を受けるとあっては、めくらで、おしで、つんぼで、手足がきかぬと同様、まことに気の毒千万な有様である。石の地蔵なら我慢もできようが、木でも石でもない生きて血のかよっている人間にこんなことをされては、いかに気の長い結構人でも辛抱しきれるものではない。いまにこの石地蔵が目を怒らし腕をまくって騒ぎ立てたら面倒なことになるだろうと思うのは、老人の取越苦労と申すものでござるかな。

(明治十五年七月、時事新報漫言、続全集一ノ一九六頁)

明治初年英書によって演説の法を知った小泉信吉が福沢に勧めて三田演説会を造ったのが日本に於ける演説の起源である．①は明治8年開館の日本最初の演説館．②は演説討論の法を初めて世に教えた「会議弁」．③は明治14年福沢等が木挽町に建てた演説会場の明治会堂．④はその頃街頭で売られていた福沢の写真で，明治9年頃の撮影．⑤は小泉信吉．⑥⑦は現在慶応義塾内にある三田演説館，東京都史蹟．

福澤諭吉著

文明論之概略　全六冊

明治八年四月十九日許可　著者藏版

文明論之概略緒言

文明論トハ人ノ精神發達ノ議論ナリ其趣意ハ一人ノ精神發達ヲ論スルニ非ス天下衆人ノ精神發達ヲ一體ニ集メテ其一體ノ發達ヲ論スルモノナリ故ニ文明論或ハ之ヲ衆心發達論ト云フモ可ナリ蓋シ人ノ世ニ處スルニハ局處ノ利害得失ニ掩ハレテ其所見ヲ誤ルモノ甚ダ多シ習慣ノ久シキニ至テハ殆ト天然ト人爲トヲ區別ス可ラス其天然ト思ヒシモノ人果シテ習慣ナルヿアリ或ハ其習慣ト認メシモノ卽

一種変則の譏言

明治十四年夏の頃から、誰いうとなく一種のおかしな話が伝えられ、近ごろ世間に大謀を企てる者があり、その企の大略はこれ〳〵で、誰と誰と連絡して、誰れが謀主で誰は金主、その企が実行されたら天下は大変だ、彼等が隠謀を企てるなら此方もこれを探ってこれに備えねばならぬと、探偵や間諜を出したり、護身の用意をしたり、ここに密談し、あそこに会合し、まことに騒がしい様子だが、さてその大謀の在るところを突きとめようとすれば、漠然として煙のようである。十月ごろからこの噂はます〳〵はげしくなって、もう包み隠しもせずに名を挙げて、誰の挙動はおかしいといい、彼の考は怪しいといい、人の頭の中まで探り出したような夢を描いて騒ぎ立てるその有様は、弓もない案山子を見て鳥の群れがさわぐようなものである。福沢諭吉などもその嫌疑をうけた一人で、秘かにおかしく思ったことがないでもない。（明治十五年三月、時事新報社説、続全集一ノ七頁）

〔史を読む〕史家の心匠公平ならず、片眼たゞ看る政と兵とのみを、兵事と政談と毎に喋々するも、知らず衣食の誰に頼ってか成るを。

①は「文明論之概略」の見返しと第一頁．②はその表紙．この書は福沢の代表的著作で，日本独立のために西洋文明を採るべきを論じたもの，特にその歴史観に注目すべきものがある．③はその史観を詠じた自作の詩．④「国会論」 ⑦「通俗国権論」，⑧「通俗民権論」は自由民権や国会開設請願の運動に大きな影響を与えた諸著作で，民間の活溌な運動は政府部内にも進歩守旧の争を生じ，遂に明治14年の政変となって大蔵卿大隈重信の追放と，明治23年に国会を開くべき詔勅の発布となった．この政変で福沢は大隈の謀主であるとの風評に非常な迷惑をうけた．⑥はその諷刺画で，大熊手とお多福の面は大隈・福沢の意味．⑤は23年国会開設の暁を想像して描いた錦絵．

節倹と奢侈

節倹というものは一個人に向ってすすめることで、社会全体に対していうのは以ての外である。天下泰平商売繁昌して一般人民の衣食住が次第によくなるのは喜ぶべきことで、奢侈を楽しむ人間の多いのはその国の富んでいる証拠である。国が富むに従って商売工業の社会では奢侈品を作って人々の快楽の需要に応じ、それによって利益を得れば自分もまたその仲間に入って共に奢侈を楽しむようになるであろう。つまり今の文明の目的は奢侈にあるといっても差支えない。ところでその奢侈は国民の中のいかなる種族がこれを楽むべきものかといえば、農工商のような生産種族こそこれに適するもので、僧侶学者官吏の如き不生産種族の間に奢侈の風がおこるときは、自分は口をきわめてその害を叫ばねばならぬ。奢侈も節倹もその行われる種族によって悪事ともなり美事ともなるのである。古風の経世家はこの大切な事実を知らないで、節倹といえば、その節倹すべき種族を問わず、社会一様にすすめ、本来不生産種族にすすめて然るべき忠告を生産種族に向ってむしろ強く説くの風があるから、うまく行かないばかりでなく殖産興業の上に妨げを生ずるような結果になるのである。

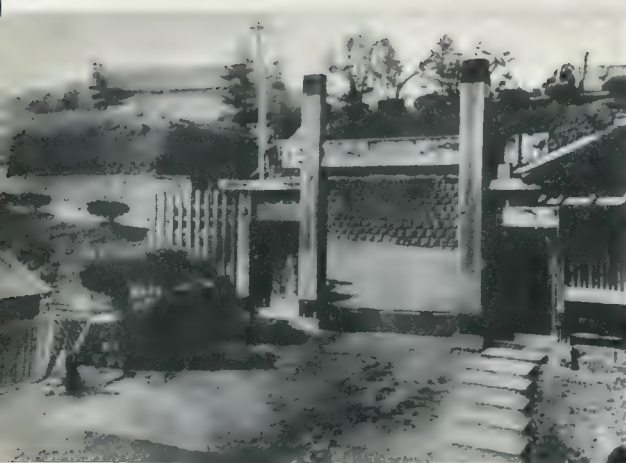
（明治二十年六月、時事新報社説、全集九ノ九五頁）

日本を東洋に於ける貿易の中心として富国の礎を築かねばならぬとの考から，福沢は⑤⑥⑦⑧をはじめ多くの著書により，経済，金融，商売の知識を普及させることに努めた．明治の初め横浜で早矢仕有的④等に開かせた丸屋善八商社は日本人の手による直輸入の元祖で，いまの丸善株式会社の起源．⑨は創業当時の同社東京店．生命保険業の元祖も明治14年阿部泰蔵③等に創らせた明治生命保険会社で，①は創業間もない頃の同社社屋．②は日本で最初の社交倶楽部交詢社の創立当時の社屋．

時事新報

明治十五年三月一日　水曜日　第一號　定價金三錢

社説

明治15年3月福沢は時事新報を創刊した．①はその社説の故に一時発行停止を命ぜられたことを報じた手紙．「何分朝野共に不学者多く困入候次第なれ共致方無之何れ一週位にて相済可申此度停止などは頓と政府の意の在る所を知るべからずあきれ果たる事共なり」②は明治15年の福沢．③は福沢の甥中上川（なかみがわ）彦次郎，時事新報初代社長．④は創刊号第一面．⑤は京橋南鍋町の社屋．⑥は福沢自筆社説原稿．

①は明治22年版の「東京諸学校一覧」と題する番附で，左側二番目に慶応義塾の名が見える．②は明治初年三田に於ける授業時間割．③は明治12年の慶応義塾卒業証書．④は旧島原藩松平侯の望楼で月波楼という．その景観は江戸名所図会にも謳われているが，明治4年福沢は校舎を新銭座よりこの島原藩邸に移した．⑤は明治20年に建った煉瓦校舎．⑦は旧藩邸そのままの正門．⑧も旧藩邸玄関のままの大学入口．⑨は創立後間もない頃の慶応義塾幼稚舎．⑥は幼稚舎の創立者和田義郎．

明治廿二年改正新版

官公
私立
東京諸學校一覽

東京農林學校
高等商業學校
高等中學校
高等師範學校
[illegible]
高等女學校
學習院
陸軍士官學校
陸軍幼年學校
海軍醫學校
海軍主計學校
東京商業學校
音樂學校
商工徒弟講習所

東京佛學校
慶應義塾
攻玉社
濟生學舎
成立學校
高等普通學校
東京英語學校
共立學校
[illegible]
同人社
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
東京物理學校
東京藥學校
神田英學校
曉星學校
豐國學校
商業素修學校
成城學校
江東義塾
日本英學館
東京英學院
日本外國語學校
戊子英學館
順天求合社

實業學校
國民英學會
二松學校
壬申義塾
[illegible]
[illegible]
整理學校
英學速成所
成醫會講習所
[illegible]
國民學館
大學豫備校
勸學義塾
駒込英學校

婚姻契約

一 男女交契両身一体ノ新生ニ入ルハ上帝ノ意ニシテ人ハ此意ニ従テ幸福ヲ享ル者ナリ

一 此一体ノ内ニ於テ女ハ男ヲ以テ夫ト為シ男ハ女ヲ以テ妻ト為ス

一 夫ハ餘念ナク妻ヲ禮愛シテ之ヲ支保スル義ヲ務メ妻ハ餘念ナク夫ヲ敬愛シテ之ヲ扶助スルノ義ヲ行フ可シ

右ニ述ル所ノ理ニ基キ當日即チ二千五百三十四年十月四日冨田鉄之助ト杉田阿継ト互ニ婚姻ヲ契約シ各自カラ姓名ヲ茲ニ記シ其實ヲ表シテ誓フ者也

東京二千五百三十四年十月四日

男 冨田鉄之助

女 杉田阿継

行禮人 福沢諭吉

證人 森有禮

婦人解放の必要

私が婦人論をかれこれと唱えるのは、もちろん婦人のために弁護して無理にも男子と争おうとするわけではない。実は男子にとっても婦人を一人前の働きある人間にするのは甚だ利益のあることで、家にあっては一家のために、国にあっては一国のために、二倍の力を得ようと思うからである。一家に夫婦二人暮しといっても、その婦人は有れども無きが如き有様では、家を支えるのは一人の力だけである。国家に於ても全人口の半分の婦人が役に立たぬとあっては、人口が半分になったと同様で、国を支えるのも半分の力しかないであろう。こんな風に婦人の力が弱くて智恵も身体も男子に劣れば、家のため国のために頼み甲斐がないばかりか、その身体が弱ければ、その産む子供も丈夫なものは少いわけで、自然に日本中の人の種を悪くして、遂には世界中に日本人ほど骨格の弱いものはないということになるではないか。これは皆、昔から婦人を苦しめた報いであるから、家を思い国を思って後世子孫の有様を恐れる者は、よくよく考えてみなければならぬところである。（明治十八年七月、日本婦人論後篇　全集六ノ五八頁）

福澤諭吉立案
中上川彦次郎筆記
日本婦人論 後編 全一冊
明治十八年八月出版

福沢の封建遺制打倒の最後の闘いは婦人の解放にあり，この活動は維新前後に始まり晩年に及ぶに従っていよいよ激しくなった．①は明治7年福沢が取結ばせた結婚契約書．②は明治20年の福沢．③は一夫一婦論を強調した明治3年中津留別の書の自筆原稿．④⑤⑥⑦は男女論に関する代表的著作．⑧は日米英の男女関係を諷刺した時事新報掲載の漫画．

言海祝宴次第

一 本会への謝詞　招待員總代

一 言海の批判　伊藤伯

一 十七年間の辛勤　西村先生

一 言海編成の…を読む　加藤先生

一 謝詞　大槻文彦氏

祝宴

招待員

下端の書き入れには「此席に出る筈なりしが差支ありて出席せざるにあらず固より出さる筈にて出さるものなれば最初より印刷に附せざりし事に致度候」とある.

学者の面目

純然たる学問上の会合に於ては、大臣も平民も區別のあるべき筈はない。学識の深浅厚薄で席順をきめようとしても無形のことで標準の立てようがないから、やむを得なければ年齢順にするか、さもなければ順序不同とするがよい。大臣を上席にするとあれば、官吏社会の人は慣れていて、学者知識人でも役人となっていれば、自然にそれで納まるであろうが、自分のような無位無官の平民は、そんな場合には等外の役人のそのまた下に居なければならないであろう。官吏社会ではそれが当然かも知れないが、政府を離れた学問上の会合で、自分は大臣などの下に坐るのを好まない。そんな窮屈論をいわずに、度量を広くして人のいうなりになって、その実は浮世を馬鹿にして通るのが、通人というものだという人もあるかも知れぬが、それでは自分の本心に恥じるばかりでなく、日本の学者社会全体の面目に関することであるから、この一点に至っては、いかなることがあっても譲ることはできない。（明治二十三年五月、時事新報雑報、続全集七ノ五九六頁）

①は福沢が学問上の事では政治家の次に名を記すをいさぎよしとせずと抗議した言海出版祝宴次第書. ②はそのため新たに刷り直した次第書. ③は学問教育と政治とを分離すべしと主張した著書. ⑤は我国に初めて細菌学を伝えた北里柴三郎. ⑥は北里のために福沢の建てた我国最初の伝染病研究所. ⑦は内務省がこれを国立に改めた芝愛宕下の伝研. ④は研究の傍ら北里が自営した結核病院芝白金養生園. ⑧は芝白金に移転した国立伝研. 後に文部省移管問題で北里はこれを去り, 独立して北里研究所⑨を建てた.

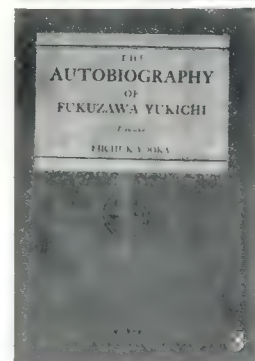
9

桃太郎

桃太郎が、おにがしまにゆきしは、たからをとりにゆくといえり。けしからぬことならずや。たからは、おにのだいじにして、しまいおきしものにて、たからのぬしはおになり。ぬしのあるたからを、わけもなく、とりにゆくとは、桃太郎は、ぬすびともいうべき、わるものなり。もしまたそのおにが、いったいわるきものにて、よのなかのさまたげをなせしことあらば、桃太郎のゆうきにて、これをこらしむるは、はなはだよきことなれども、たからをとりてうちへかえり、おじいさんとおばあさんにあげたとは、ただよくのためのしごとにて、ひれつせんばんなり。

(明治四年十月、日々のをしへ、続全集七ノ四〇六頁、原文のまま)

①は「福翁自伝」の自筆原稿で，日清戦争のことに触れている一節である．「一国全体の大勢は改進々歩の一方で，次第々々に上進して，数年の後その形に顕はれたるは，日清戦争など官民一致の勝利，愉快とも難有いとも云ひやうがない．命あればこそコンナ事を見聞するのだ，前に死んだ同志の朋友が不幸だ，アヽ見せて遣りたいと，毎度私は泣きました．実を申せば日清戦争，何でもない．唯是れ日本の外交の序開きでこそあれ，ソレホド喜ぶ訳けもないが」．

②は朝鮮の志士金玉均，彼は朝鮮を清国の隷属から独立させようとして事大党から迫害を受け，日本に亡命して福沢に庇護されていた．明治27年清国の刺客に上海に誘い出され，そこで暗殺された．③は福沢が金玉均をかくまっておいた北里の結核病院養生園内の一小亭．④は明治27年の福沢．⑤は福沢の考案により今泉一瓢の描いた「北京夢枕」と題する錦絵で，老大の清国が阿片の煙を大法螺の形に吹いて酔夢している間に英米露仏の諸国が侵略の軍を進めている有様を現わしたもので，明治17年の作である．

①は「福翁自伝」発売の広告．②は「福翁自伝」単行本の表紙．③は英訳「福翁自伝」の表紙．④は自伝撰述に関するメモを納めてある封筒．⑤⑥は自伝撰述のメモの一部．⑦は明治33年の福沢夫妻．「明治三十三年写真，福沢諭吉夫妻，共に旧奥平藩の士女なり」⑧時事新報に掲載された第一回分の「福翁自伝」の一部．

本日發行

福翁自傳

全一冊
紙數五百五十頁
正價金四拾錢
郵稅八錢

發行所 時事新報社
大賣捌 北隆館 東京堂

時事新報　明治三十一年七月一日　金曜日　（二）

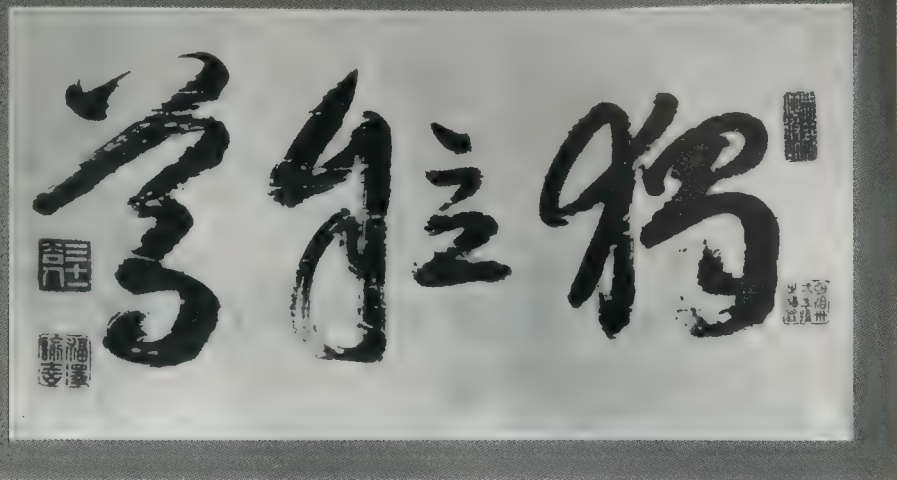
福翁自傳（一）　福澤諭吉 口述　矢野由次郎 速記

幼少の時（一）

福沢は明治二十七年六十一歳を迎えたが、日清戦争中であったので、翌年十二月十二日の誕生日に還暦の祝賀会を催した。三十一年「福沢全集」全五巻が刊行された。この頃、彼は生涯の閲歴を述べて「福翁自伝」と名づけ、これを時事新報に連載中、三十一年九月二十六日脳溢血に罹り、幸にして程なく癒えたが、健康は前ほどでなく、その後は殆んど著述の筆を執ることがなくなった。病後刊行の諸著作はみな病前に成ったものである。病後、彼は新時代の道徳の基準を示すために門下の人々に「修身要領」を編纂させた。三十四年一月末、病気再発して二月三日遂に長逝した。葬儀は一基の花もなく極めて厳粛質素に行われ、知るも知らぬも朝野を挙げてこの巨人の死を哀しまぬはなかった。法名は大観院独立自尊居士。

第三条
自ら労して自から食ふは
人生獨立の本源なり獨立
自尊の人は自労自活の人たら
ざる可らず

福翁百話
全
時事新報社發兌

福澤先生浮世談
全

①は福沢晩年の朝の散歩姿．②は福沢の病後，門下の人人をして編纂させた「修身要領」の一節を記したもの．③は「福翁百話」の表紙て，④は「福沢先生浮世談」の表紙．⑤は「修身要領」の標語「独立自尊」の書．⑥は明治34年2月福沢死去の時の葬列の一部．⑦は三田の福沢邸の玄関．⑧は上大崎常光寺にある福沢の墓碑．

賑やかな夢

回顧すれば六十何年、人生既往を思えば恍として夢の如しと毎度開く所であるが、私の夢は至極変化の多い賑やかな夢でした。旧小藩の小士族、窮屈な小さい箱の中に詰込まれて、藩政の楊枝を以て重箱の隅をほじくる其楊枝の先きに掛った少年が、ヒョイと外に飛出して、故郷を見捨てるのみか、生来教育された漢学流の教をも打遣って西洋学の門に入り、以前に変った書を読み以前に変った人に交り、自由自在に運動して二度も三度も外国に往来すれば、考はだんだん広くなって、旧藩は扨置き日本が狭く見えるようになって来たのは何と賑やかな事で大きな変化ではあるまいか。さて人間の慾には際限のないもので、外国交際又は内国の憲法政治などに就ては政治家の事として差置き、私の生涯の中に出来して見たいと思う所は、全国男女の気品を次第々々に高尚に導いて、真実文明の名にはずかしくないようにする事と、仏法にても耶蘇教にても孰れにても宜しい、之を引立てて多数の民心を和らげるようにする事と、大いに金を投じて有形無形、高尚なる学理を研究させるようにする事と、凡そ此三ヵ条です。人は老しても無病なる限りは唯安閑としては居られず、私も健全なる間は、身に叶う丈けの力を尽す積りです。（明治三十二年二月、福翁自伝、全集七ノ六一―六頁）

福沢は慶応義塾在学の少年子弟を愛し，これと共に行楽嬉戯することを喜んだばかりでなく，卒業の後も永く親みを重ねることに心掛け，常にその家に客を集めて賑やかに談笑することを好んだ．①は明治7年慶応義塾内の乗馬グループ，左から朝吹英二，福沢諭吉，中上川彦次郎，小幡篤次郎荘田平五郎，草郷清四郎．このうち草郷は紀州藩の騎馬隊の出身で，このグループの師範役であった．②は門下の一人佐伯友光に贈った「福沢全集緒言」．③は小泉信三の少年時代に福沢が書いて与えた習字手本．④は門下生と共に朝の散歩を楽しむ晩年の福沢．⑤は慶応義塾幼稚舎生徒の卒業記念撮影に加わった晩年の福沢．⑥は年月は正確にわからないが，帝国議会初期の慶応義塾出身貴衆両院議員の会合の記念撮影であろう．

1858年に福沢の家塾から起った慶応義塾は，今では小学校から大学院に至るまでの，世界でも珍らしい一貫教育体系を持つ学塾となり，まさに創立百年になろうとしている．右頁の航空写真は①が三田の慶応義塾本部で，②が四谷の大学医学部，③は三田の正門から図書館の塔を仰ぐ風景．④は慶応義塾の教育目的を記した福沢の遺墨．⑤は日吉の普通部校舎．⑥は三田の女子高等学校．⑦は日吉の大学自然科学教室のある第二校舎．

福沢諭吉年譜

1834（天保 5） 12月12日（陽暦1835年1月10日）大阪玉江橋北詰中津藩蔵屋敷に生る

1836（天保 7） 父百助歿，母子6人藩地中津に帰る

1837～1853 幼時より叔父中村術平の養子となる 14～15 歳の頃より漢学を学び始む

1854（安政 1） 蘭学に志し長崎に遊学す

1855（安政 2） 大阪に出で，緒方洪庵の適塾に入る

1856（安政 3） 兄三之助病死のため中津に帰り，福沢家をつぐ．11月再び上阪，緒方の内塾生となる

1857（安政 4） 緒方塾に在学，この年塾長となる

1858（安政 5） 10月江戸に出で，築地鉄砲洲奥平家中屋敷内に蘭学塾を開く――慶応義塾の起源

1859（安政 6） 英学に転向を決意し，独力で学ぶ

1860（万延 1） 1月軍艦奉行木村摂津守の従僕名義で咸臨丸に乗組み渡米，5月帰朝．幕府の飜訳方に雇わる．「増訂華英通語」刊

1861（文久 1） 鉄砲洲より新銭座に移り同藩士土岐太郎八次女錦と結婚．12月遣欧使節に随行と決す

1862（文久 2） ヨーロッパ諸国を巡歴，12月帰朝

1863（文久 3） 新銭座より鉄砲洲中津藩邸内に転居

1864（元治 1） 中津に帰り小幡篤次郎等を伴い帰京．幕府に召抱えられ外国方飜訳局に出仕す

1865（慶応 1） 公務の傍ら欧文の新聞雑誌を飜訳す

1866（慶応 2） 刀剣を売払う．「西洋事情」初編刊

1867（慶応 3） 幕府の軍艦受取委員の一行に加わり再び渡米．「雷銃操法」「条約十一国記」刊

1868（明治 1） 4月鉄砲洲より新銭座に移り時の年号（改元9月）に因み塾を慶応義塾と命名．8月幕府より退身．「西洋事情」外編「窮理図解」刊

1867（明治 2） 福沢屋諭吉の名を以て出版業自営に着手．「洋兵明鑑」「世界国尽」刊

1870（明治 3） 5月腸チフスにかかる．冬中津に帰り母を伴って帰京．「西洋事情」二編刊

1871（明治 4） 慶応義塾を新銭座より三田に移す

1872（明治 5） 京阪神を経て中津に行き中津市学校を視察す．「学問のすゝめ」初編刊

1873（明治 6） 自宅にて集会し演説討論の練習を始む．「改暦弁」「帳合之法」初編「会議弁」刊

1874（明治 7） 1月慶応義塾幼稚舎設立．5月母お順歿．三田演説会発足す．富田鉄之助と杉田お縫との結婚の媒酌人となり婚姻契約書を作る．所謂楠公権助論の物議に対し弁駁を試む．長沼事件に関与す．「民間雑誌」創刊

1875（明治 8） 三田演説館を開く．この頃より「覚書」を記し始む．「文明論之概略」刊

1876（明治 9） ミル「功利論」を読む．二子を伴い京阪地方に遊ぶ．「家庭叢談」創刊

1877（明治 10） 「家庭叢談」を「民間雑誌」と改題し週刊新聞として発足．「旧藩情」「丁丑公論」脱稿（当時出版せず）．「民間経済録」初編刊

1878（明治 11） 「民間雑誌」廃刊．東京府会議員当選．「通貨論」「通俗民権論」「通俗国権論」刊

1879（明治 12） 東京学士会院設立され初代会長に就任．東京府会に於て副議長に選ばれたるも固辞し間もなく議員をも辞す．「民情一新」「国会論」刊

1880（明治 13） 交詢社設立

1881（明治 14） 東京学士会院会員を辞任．10月政変起り福沢とその門下の人々政府の圧迫をうける．「時事小言」刊

1882（明治 15） 3月時事新報創刊．春頃金玉均と会見．「帝室論」「徳育如何」「兵論」刊

1883（明治 16） 一太郎捨次郎の二子米国に留学す．「学問之独立」刊

1884（明治 17） 「全国徴兵論」「通俗外交論」刊

1885（明治 18） 「日本婦人論」後編「品行論」刊

1886（明治 19） 全国漫遊を思立ち，3月東海道を旅行し，5月茨城地方に遊ぶ．「男女交際論」刊

1887（明治 20） 新富座にて初めて芝居をみる

1888（明治 21） 二子帰朝．「日本男子論」刊

1889（明治 22） 全家族を伴い京阪地方に遊ぶ

1890（明治 23） 慶応義塾大学部設置

1891（明治 24） 「言海」出版祝賀会．「瘠我慢之説」を草す（当時公けにせず）

1892（明治 25） 京阪地方に旅行．北里柴三郎をたすけて伝染病研究所の設立に尽力す．「国会の前途・治安小言・国会難局の由来・地租論」刊

1893（明治 26） 「実業論」刊

1894（明治 27） 二子を伴い展墓のため中津に帰省．8月日清戦争起る

1895（明治 28） 妻子を伴い広島に行く．4月日清戦争終る，12月還暦の寿宴

1896（明治 29） 家族と共に伊勢参宮をなし，又信越上州方面に遊び善光寺にもゆく

1897（明治 30） 家族を伴い京阪山陽地方に旅行す．「福翁百話」「福沢全集緒言」刊

1898（明治 31） 9月脳溢血症を発す．「福沢全集」全5巻「福沢先生浮世談」刊

1899（明治 32） 「福翁自伝」「女大学評論・新女大学」刊

1900（明治 33） 2月「修身要領」発表．5月著訳教育の功により皇室より金5万円を下賜さる

1901（明治 34） 脳溢血症再発．2月3日長逝．衆議院は満場一致哀悼を決議す．同月8日麻布善福寺に於て葬儀を行う．墓は府下白金村本願寺内（現在は品川區上大崎1丁目常光寺境内）．「福翁百余話」「明治十年丁丑公論・瘠我慢之説」刊

1907（明治 40） 慶応義塾創立50年記念式典挙行．「慶応義塾50年史」刊

1923（大正 12） 慶応義塾に於て福沢諭吉伝記編纂の議起り，石河幹明これに当る

1924（大正 13） 6月3日妻お錦歿

1926（大正 15） 時事新報社編「福沢全集」全10巻刊

1929（昭和 4） 大阪に福沢誕生地記念碑建つ

1932（昭和 7） 石河幹明著「福沢諭吉伝」全4巻刊．慶応義塾創立75年記念式典挙行．「慶応義塾75年史」刊．慶応義塾図書館編「福沢先生遺墨集」刊

1933（昭和 8） 慶応義塾編「続福沢全集」全7巻刊

1934（昭和 9） 慶応義塾にて福沢誕生百年祭挙行．清岡暎一により「福翁自伝」の英訳成る

1936（昭和 11） 時事新報廃刊

1938（昭和 13） 6月長男一太郎歿

1943（昭和 18） 慶応義塾に臨時福沢選集編纂所を設け，「福沢選集」全12巻の刊行を企てたが，戦時下僅に「経済論集」1巻を出してやむ

1945（昭和 20） 戦火により福沢邸焼失す

1946（昭和 21） 時事新報復刊

1950（昭和 25） 慶応義塾及び中津に於て福沢歿後50年祭を挙行．文化郵便切手「福沢諭吉」発行

1951（昭和 25） 社団法人福沢諭吉著作編纂会（理事長小泉信三）生れ，「福沢諭吉選集」全8巻刊

1953（昭和 28） 「愛児への手紙」刊

1954（昭和 29） 福沢諭吉伝記映画「かくて自由の鐘は鳴る」（東宝）完成．図録「福沢諭吉の遺風」刊．大阪に誕生地記念碑再建．福沢諭吉著作編纂会の福沢全集決定稿の校訂編集事業続く

戦時の迷彩のあとが痛ましく残っている慶応義塾幼稚舎の校舎も，やがて再び純白に輝く日が来るであろう．幼い人々よ．日本の独立を生涯の念願とした福沢諭吉の遺業をつぐ者は，君たちの中から生れ出なければならない．

福沢諭吉銅像